



桃山学院大学図書館

「世界の市民」の育成

桃山学院は115年もの伝統を誇る、大阪で最も古いキリスト教私学の一つです。その歴史は、明治初期の大阪に誕生した生徒11名の小さな男子校に始まります。

英国聖公会宣教協会(CMS)の責任者として来日し川口外国人居留地を拠点に伝道活動を行っていたワレン師(1841-1899)は「キリスト教信仰に基づく近代的な教育」を目指して、1884(明治17)年、居留地内の聖三一教会(Holy Trinity Church)の一室に、小さいながらも高い理想と情熱に満ち溢れた個性的な学校を設立しました。この学校では宣教師による英語と聖書の教育も行われました。「英語の桃山」という伝統は、この頃に始まりました。

1890(明治23)年に高等英学校を設立し、その後現在の大阪市天王寺区筆ヶ崎町に移転。1895(明治28)年に「桃山学院」と改称されました。これは、当時学校のあった界隈が桃の名所として知られ「桃山」と呼ばれていたことに由来します。1902(明治35)年には桃山中学校を開校、戦後の学制改革に伴い桃山学院中学校・桃山学院高等学校となりました。

1959(昭和34)年に、キリスト教新教伝来100周年を記念して、桃山学院大学が開学されました。1995(平成7)年には和泉市まなび野の現在のキャンパスに移転しました。ここでは経済学部・社会学部・経営学部・文学部・法学部の学部学生と

大学院生約7,500名が、建学の精神に基づき「世界の市民として活躍しうる国際人」となるために勉強を続けています。

バリアフリーに配慮した知の中核

小高い丘の上に広がる美しく開放的なキャンパスに一段と高くそびえる聖アンデレ館。聖アンデレとはイエス・キリストの最初の弟子で桃山学院の学院章の由来でもある聖人の名前です。その地下2階から地上3階までを占めるのが桃山学院大学図書館です。聖アンデレ館の4階は大学院生の研究室、5階には総合研究所、6階から11階までは先生方の研究室があり、まさに桃山学院大学の知の中核といえます。

聖アンデレ館1階の正面入り口を入ると、吹き抜けのあるホールの向こうに図書館の入り口の扉があり、あたかも校舎の中に図書館の建物をはめ込んだようです。

図書館の入り口ゲートは、通常よりも広

めの幅を取っています。これは、車椅子の方も介助なしに通れるように、という配慮からです。段差のない館内は、書架の間も車椅子でスムーズに通れます。参考図書など頻繁に参照する資料は、車椅子からでも自由に手を伸ばせるように、低めの書架に収めています。身障者用のエレベーターは、カウンターから目の届くところに設置されており、職員がいつでもサポートできます。図書館3階には視覚障害者のための対面朗読室も設置されています。このように、バリアフリーに対しては、十分な配慮がなされています。

3つのキーワード

——開放性・利便性・収書

「この図書館のキーワードは、まず開放性、次に利便性、そして収書です。この3つでサービスを組み立てて提供することに尽きます」と、熊谷次郎館長はおっしゃいます。

桃山学院大学図書館では全館開架方式を採用しています。現在の図書館が開館した際に、利用者がすべての資料を自由に閲覧できるように、閉架書庫から「安



全開架書庫」に変えました。つまり、利用者はメインカウンターに利用者証を預けるだけで、自由に地下書庫に入り、自由に閲覧し、貸出を受けることができます。全館開架方式を採用して以来、それまで閉架書庫にあった専門図書や研究図書の閲覧や貸出が増えました。反面、資料の配列の乱れが多くなったため、図書館では大学院生アルバイトによる配架や配列の修正を行っています。

利便性を高めるためには、利用者がパソコンでOPACやインターネットを使って、情報を入手しやすくすることを心がけています。図書館のホームページからはOPACやいろいろな情報源にアクセスすることができ、その利用方法も詳しく紹介されています。しかし、せっかく便利な情報源があっても、活用できなければ意味がありません。そこで図書館では、学生への利用指導にも力を注いでいます。新入生全員に対して基礎演習などの授業時間にガイダンスを行い、図書館の開放性と利便性を教えます。卒業論文を作成する前には、希望によってその卒業論文のテーマに沿った文献探索ガイダンスをゼミ単位

で行います。

図書館へのアクセスが正面入り口だけではなく、3階からも出入りできることも、図書館の利便性につながっています。大学院生や教員は、研究室のパソコンでOPACを検索し、必要な資料があればそのまま3階から図書館に入って利用できます。3階の入り口は情報センターのスタディホールにも直結しており、学生たちもOPACで検索して、すぐに図書館を訪れることができるので便利です。

市民に対しても開放性や利便性を提供

大学が現在のキャンパスに移転したのと同時に、図書館も一般市民に対する資料の閲覧や貸出のサービスを始めました。桃山学院大学の学生・教職員以外で図書館の利用を希望する場合は、登録料を払い入館カードの発行を受けます。2004年11月現在286名の市民が利用者登録を行っています。地元・和泉市民に限らず、誰でも利用者登録ができます。入館カードの発行を受けた後は学生とほぼ同じように閲覧や貸出ができます。地下書庫にあ



英国議会文書

イギリス議会の制度が成立した初期から現代までの本会議録や委員会報告などの資料がそろっています。古くからの両院の文書を継続的に収集しているという点で、非常に価値の高い資料です。

る洋書や英国議会文書のようなコレクションも閲覧できます。

また、桃山学院大学は社会人学生を積極的に受け入れています。学部にも所属する学生には40歳以上の方が約10名、社会人聴講生として約320名が学んでいます。図書館は「社会人学生にも一般の学生と同じように接していますが、勉強意欲が旺盛なので緊張感があります」(角田房子課長補佐)。

利便性も資料の充実があってこそ

このような開放性や利便性も、資料の充実があって初めて、現実のものとなります。「やはり学部学生の学習に必要な図書や、大学院生が研究を行う上で不可欠な文献をそろえることが基本であり重要です」と、吉田雅憲課長はおっしゃいます。実際に、図書館に一步足を踏み入れると、数多く集められた資料の醸し出す雰囲気は圧倒されます。

資料の充実から始まる最上の利用者サービス

大阪で最も伝統あるキリスト教私学の一つ桃山学院。

桃山学院大学図書館では、体系的に収集された資料が、アカデミックな雰囲気を醸し出しています。充実した資料を基礎に、開放性と利便性を考慮しながら、よりよい利用者サービスを提供するための環境整備が続けられています。

聖アンテレ館



桃山学院大学図書館職員の皆さん。



リンディスファーン福音書と グーテンベルク聖書(四十二行聖書)

リンディスファーン福音書 (Lindisfarne Gospels 写真右) は、8世紀前半イギリス北部リンディスファーン島の修道院の司教エアドフリスにより作られたラテン語聖書の重要写本です。写真は、1852年ヴィクトリア時代の金細工師が再現した装丁をもとにしたレプリカ版です。10世紀末に主席司祭アルドレッドにより書き加えられた英語による逐語訳が忠実に再現されています。

グーテンベルク聖書(写真左)は、1455年に活版印刷の発明者ヨハン・グーテンベルクにより着手され、フスト、シェファーの両名により完成されたものです。写真は1968年刊のもの。図書館ではこれ以外に原本当時の姿を忠実に再現した複製を所蔵しています(HPIに掲載)。



Illuminated manuscript

13世紀中期にバビで制作された50行2段組のラテン語聖書の彩飾写本(ベラム刷り)の1葉(マルコによる福音書5-6章部分)。

桃山学院大学図書館は、蔵書数もさることながら、資料が体系的にまとまった形で収集されていることが大きな魅力です。大学の創立が昭和30年代と比較的新しいため、図書館では大正や明治の古い文献はなかなかそろえることができません。ところが複製版がたくさん出るようになったため、オリジナルを個々に収集するのではなく、複製版をセットで集めることができるようになったそうです。最近では、古い書籍がマイクロフィルムやCD-ROMになって発行されるので、さらに購入しやすくなりました。「これは後発組のメリットですね」(熊谷館長)。

また、収書に対する全学的な取り組みもありました。桃山学院大学では、学内の資料を利用者が利用しやすいように、本来学部や研究室が所蔵するような資料も図書館が一括して収集管理しています。つまり、図書館が主導して大学全体の資料を集めます。収集にあたっては、資料収集の組織や責任、収集資料の種類や範囲を取り決めた「図書館資料収集に関する内規」に従って、教員と図書館員が予算配分や収書方針を策定し、収集にあっています。中でも特徴的なのは、各学部から数名の収書協力委員を選んでもらっていることです。この結果、学部間でのバランスのとれた選書が可能となっています。「OPACで自分の図書館を調べたときに、そこに必ず目的の本があるということは、誇りに感じますね」(熊谷館長)。

いくつかのコレクションは、長い間継続的に収集した結果、非常に価値のあるものとなっています。地下2階の書庫にある英国議会文書は、20年近い年月をかけて徐々に集められたものです。有価証券報告書総覧は、市販開始当初から冊子体をすべて購入しており、広く経済学や経営学、あるいは学生の就職活動に役立てられています。

利便性と開放性の方針は、収書に際しても十分に考慮されています。例えば、大学によって、希少価値がある古い書籍は多少高額でも購入するところは少なくありません。しかし、桃山学院大学では、利用者の利便性を第一に考えています。したがって、「購入したけれど利用者には見せなかったり、見るのに特別な許可が必要だったりするような本ではなく、むしろ誰もがいつでも見られるような本を買いたいと思っています」(熊谷館長)。数百年前の本でも、後の時代にそれが複製されたものがあれば、それを購入して、教育や研究に活用していこうという方針です。

キリスト教関係の資料の充実

ただし聖書や福音書など、キリスト教に関係するものについては、桃山学院大学の建学の精神を象徴するものとして、特別予算を組んで購入しています。たとえばコーベルガーのラテン語聖書は第3版のオリジナルで1478年に刊行されたインキュナブラですが、「これはさすがに開架でどうぞ、というわけにはいきません」(吉田課長)。

桃山学院は、英国聖公会(CMS)の宣教師によって創立されました。CMSの世界各地での布教活動によって残された文書類の集成がChurch Missionary Society Archiveです。これはさまざまな学問領域における貴重資料でもあり、桃山学院には既刊分のほとんどがそろっています。そのため、「アイヌ民族への伝道を研究されている女性が北海道から来訪されたり、英国人の大学院生が何日間も滞在してたくさん資料を複製して帰られたりすることもありました」(角田課長補佐)。

迅速なサービスと豊富な雑誌タイトル数

桃山学院大学では図書館相互利用にも力を入れています。NACSIS-ILLや相互貸借のネットワーク化により、利用件数はますます増加しています。文献複製は、現時点では依頼よりも受付のほうが多く、「明らかに輸出超過です」(齊藤賢次課長補佐)。受付が多いのは迅速なサービスを心がけてきたことが、他の図書館からの信頼を得たためと思われる。

洋雑誌を多く所蔵していることも受付の多い理由の一つです。多くの大学図書館で契約タイトル数を減らす傾向にある中で、桃山学院大学ではタイトル数を減らさずに維持しています。「とはいっても他大学に比べると受付も依頼も多いとはいえません。図書館での資料購入には限界がありますので、ガイダンスなどで相互利用制度を周知させ、図書館サービスの活用を促していきたいと考えています」(齊藤課長補佐)。





所蔵資料は検索して 利用できてこそ

これらの充実した資料をすべて国立情報学研究所の目録所在情報サービス(NACSIS-CAT)に所蔵登録していくことが、これからの課題です。「LIMEDIOを使ってスムーズにより早く登録できればと思っています」(頼田法子さん)。

学生はOPACを使って資料を検索し、調べていきますが「やはりデータがきちんとしていなければ、資料を利用できないことをいつも痛感しています。最近では特に利用者サービスに重きを置くことが多いですが、信頼できる書誌データが整備されていることが、サービスの利便性の向上や活発な利用につながります」(頼田さん)。

レファレンスのノウハウを 共有・蓄積

「LIMEDIOを使い始めてから、図書予約も増えました」と角田課長補佐はおっしゃいます。試験前などは職員総がかりで予約の処理をすることもあるそうです。「レポートや試験のテーマが直接書名に表現されているものには予約が殺到します」(角田課長補佐)。それに代わる資料が他にもたくさんあるのに、なかなか探せない学生も少なくありません。そのような学生からレファ

レンスの問い合わせがあったときには、資料の探し方から丁寧に指導します。

現在は4名の職員が交代でレファレンス業務を行っていますが、質問内容や回答に至るまでの過程をレファレンス用紙に記録しています。「記録し、内容を確認し合うことで、担当者の知識を共有して、蓄積していくのです」(角田課長補佐)。記録された質問は、定期的にまとめて教授会に提出したり、学生たちがどのようなテーマについて研究し、何に関心を持っているかという傾向を調べるなど、学生の指導に活用されています。

司書講習への協力も

桃山学院大学における司書講習の歴史は古く、開学の翌年1960(昭和35)年から文部科学省の委嘱を受け実施されています。京阪神で司書講習を行っているのは桃山学院大学だけです。近畿圏の図書館に勤めている司書の多くがこの講習を受けています。「そういう意味ではある種の親しみを感じますね」(吉田課長)。

図書館では、司書講習に実習の場を提供するだけではなく、職員が参考業務や情報検索の講習にも協力しています。参考業務には資料が必要な上、情報検索にもノウハウが求められます。「私たちは日頃

からそういうサービスを学生たちに提供しており長年の蓄積があるので、そのノウハウを活用しています」(熊谷館長)。

図書館は大学にとって 心臓のようなもの

「経済学の用語で言えば、図書館は知識のストックをする場です。本学のストックは充実しているので、それを使ってたくさんフローを出してほしい。フローはやがて戻ってきてストックとなるので、それをまた生かして行ってほしいと思います。ストックなしのフローはありえないのですから」と、熊谷館長はおっしゃいます。「せっかく知識の蓄積があるのだから、それを活用するための能力を利用者には身につけてほしい。そのために図書館はもっとアピールしてほしい」とおっしゃいます。「デジタルライブラリへの取り組みは重点課題なのですが、ひと昔前の図書館には、アナログ的な雰囲気が色濃くあったように思います」とおっしゃるのは齊藤課長補佐。「図書館へ通って得られるものも大切にしていきたいですね」(齊藤課長補佐)。

「図書館は大学にとって心臓です。血液が図書であり雑誌などの資料であるわけです。図書館が盲腸のような感じになっていくと、大学は衰退してしまいます。単に資料があるだけではなく、それを活性化していくために、私たちは資料と利用者との仲人役をしっかりと務めなければいけないと思います」(吉田課長)。

■この記事は2004年12月7日の取材に基づいています。



図書館プロフィール

LIMEDIO導入:2002年3月

ユーザー数	奉仕対象	8,157人
	図書館職員	13人
データ	蔵書数(図書)	570,548冊
	蔵書数(雑誌)	6,496種
	年間受入数(図書)	19,200冊
	年間受入数(雑誌)	2,924種
	一人当たり年間貸出冊数	8.6冊
開架図書率		94.7%

2003年3月31日現在のデータ

システム構成

	図書館	総合研究所	視聴覚事務局
業務DBサーバー	1式		
検索DBサーバー	1式		
アプリケーションサーバー	4式		
業務用端末	27台	1台	4台
業務用プリンター	4台		
利用者検索用端末	21台		
利用者用プリンター	4台		